

なぞの玉

昨年の夏、加治にお住まいの森下信夫さんが不思議なものを持ってきてくれました。それは、直径1・2cm、1・5cmの白っぽい色の小玉です。数は全部で8個あります。森下さんにお話を伺うと、畑の耕作中にたびたび発見したものを拾い集めておいたそうです。また、さらにお話を伺うと、お父さんも戦前に同様のものを拾ったことがあり、当時小学生だった森下さんこう話したそうです。「うちの4代前のご先祖様は鉄砲を撃つのが上手で、岡崎からわざわざ田原の殿様に召抱えられただけな。きつとこの玉も鉄砲の玉だぞん。」（※その玉は田原中部小学校に寄贈され、現在は博物館に収蔵されています。）

さて、実際の玉を見てみましょう。この玉は、鉛などの金属ではなく、焼き物であることがわかりました。さらによく観察すると、玉のいくつかにはガラス状の薄青の付着物が付いていました。この付着物は、焼き物を焼くとき、燃料である樹木の灰が化学変化を起こし、このようなガラス状になったものです。また、これらの特徴から、

渥美半島で鎌倉時代（13世紀）に焼かれたものと分かりました。すると、二つの疑問が湧いてきました。

①土を焼いた玉が、本物の鉄砲の玉として使用可能か？火薬でバラバラになっってしまうのか？

②玉の年代は鎌倉時代だが、日本に鉄砲が伝来したのは1543年で、この時代には鉄砲はなかったのでは？

実は、土を焼いたこの玉は通称『陶丸』と呼ばれており、東海地方で盛んだった焼き物の窯でたびたび発見されます。しかし、いまだ使用方法が分からない「なぞの玉」なのです。その上、渥美半島では東部校区の数原で

見つかっているのみで、大変珍しい貴重なものといえます。森下さんの畑は、この時代焼き物を焼いた窯が眠っているのでしょうか。この玉は、年代的にも強度的にも鉄砲の実弾とは言えませんが、しかし大事なことは、森下さんのお父さんの口マン溢れる昔話を覚えていたということ。そして、その記憶を元に畑で発見したその玉を大事に保管してくれていたということ。

情報化が進み、世代という縦のつながりや地域の一体感が薄くなった今日ですが、やはり伝統文化とは、地域へのふれあいの中から生まれるものだ、と感じた出来事でした。（増山）



●陶製の「なぞの玉」。スケールと比べると実際の大きさが想像できます。一体、何に使われた物なのでしょう？

▽田原町博物館 222局1720

今月の表紙 COVER STORY

「始まりと終わり」「出会いと別れ」「成功と失敗」…。春という季節は、私たちに大きなドラマをもたらします。様々な生活の区切りがこの季節に集約されているのは、私たち日本人が、とりわけ春という季節を大切にしている証拠ではないでしょうか。香しく美しい花や、心の琴線に触れる鳥のさえずりなど、私たちに生きる力、新しい生命の息吹を与えてくれるような春。五感で感じる以上に、心で感じる季節と言えるかもしれません。一方で、新たな生活の始まりから、不安定な心理に陥りやすい季節であることもまた事実。そんなときは、ちょっと時間を見つけて春を探しに出かけてみませんか？それも、歩くスピードで。『広報たはら』の表紙は、4月号から『天』然になりまます。（写真・サンテパルクでたくさんの春が見つかりました。）

【人口と世帯数】

総人口	36,884人	
男性	18,839人	
女性	18,045人	
世帯数	11,563世帯	
出生	18人	死亡 16人
転入	83人	転出 79人
増減	6人	

（平成15年3月1日現在・増減は2月中）

【行政面積】 82.86 km<sup>2</sup>

（平成11年10月1日現在・国土地理院調べ）